

さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように
群馬の教育や文化の話題を普段着のまま紹介するシリーズ



オルタナティブスクールとは

alternative は英語で「二者択一の」「選択肢」を意味します。オルタナティブスクールは既存の学校教育とは異なった思想のもとに教育をほどこそうとする民営の学校で、世界中でさまざまな形のオルタナティブスクールが運営されています。不登校の子どもを受け入れるフリースクールや、家庭での学習を中心とするホームスクールもこの範疇に含まれるとされます。学校教育法に依らない学校であることから、公的な支援に頼らず、民間の力で人件費や運営費をまかなわなければならないという財政的な課題をかかえていることが多く、今回訪問した玉村町の「たんぽぽ小学園」もその例にもれません。そんな学校で子どもたちはどのような学びと生活をしているのでしょうか。

1 時間目は読み聞かせ

4月6日（水）午前10時、玉村町角淵にある「たんぽぽ小学園」を訪問しました。小さな教室には、12人ほどの子どもたちが座っていました。4日の入学式で2人の1年生が仲間入りしたそうです。ちょうど、1時間目「読み聞かせ」の時間の最中で、子どもたちは絵本に釘付け。スタッフの鎌田いづみさんの巧みな語りにつられて、様々な声が飛び交い、生き生きした反応を見せていました。「くいしんぼうのおおむしくん」（槇ひろし作）「クリコ」（シゲタサヤカ作）、子どもたちの大好きな作品のようです。

休み時間になると、ほとんどの子どもたち



は外に飛び出して、リップスティック（二輪のスケートボード）を楽しんでいました。

2 時間目はほめほめ文となぜなぜ文

2 時間目は、国語の時間でしょうか。「あきちゃん」ことツッキー晶子さんが、『ほめほめ文』と『なぜなぜ文』を書いて」と指示しました。「ほめほめ文」は自分のいい所を書いていきます。いい所を書くことで、子どもは自分に自信をもてるようになるようです。一斉にというわけでもなく、なかなかすぐに取り組めない子どももいますが、晶子さんは子どもたちの中に入り、書いた文章を読んで「うーんいいねえ」と声をかけ、漢字の間違いを直したりアドバイスをしたりしていきました。

明日は味噌汁の日だよ！

一通り終わると、明日の家庭科について説明がありました。「明日は味噌汁の日だよ。何を持ってくるんだっけ？」「味噌汁の具にするお野菜、切って持ってくる」「それから？」



「おにぎり持って来る」「おにぎりは自分で握ってくるんだよね」「お味噌汁にはみんなで作ったお味噌を入れて作ります。」

「味噌汁の日は、粗食の日で一す。粗

食というのは、悪く言えば粗末な、貧乏な食事。みんな普段ハンバーグとかステーキとか食べているよね。でもそういうの食べられない人のことを思って。」「戦争の時は食べられなかった」（と、卒業生のレオン君が解説。彼はこの春から自由の森学園中学校に入学する。）「そうね、『火垂るの墓』で見たよね。」

ツッキーさんの家の庭で昼食

昼食の時間はそれぞれ持参のお弁当を食べます。今日はとても暖かく晴れた日なので、ツッキーさんのお家まで歩いて行って、そこのお庭でのお昼。ちょっとしたピクニック気分です。お庭の隅には、かまどがありました。子どもたちが泥と藁とを混ぜて作った手作りかまどだそうです。「このかまどで、大豆を煮たりするんですよ。」鶏小屋もありました。なんだか強そうな黒い鶏が 3 羽いました。卵を産ませるための白色レグホンではなくて、「原種に近いので毎日卵を産みません。」とのこと。

ツッキー晶子さんにインタビュー

せっかくのお昼休みに時間をとっていただいて、ツッキー晶子さんにお話を聞きました。たんぼぼ小学園代表のツッキー晶子さんは、夫のツッキー・カールさんとの間に 4 人の子どもを持つ翻訳通訳士です。たんぼぼ小学園は、2016 年 4 月に開校した「市民立」のオルナティブスクールです。一般的なフリースクールと違い、最初から別の選択をしようという意味での「オルナティブスクール」です。

Q：なぜこういうスクールを始めたのですか？

私は 20 代でドイツに渡ったのですが、子どもたちはなぜみんなキラキラしているんだろう、学生たちはなんでこんなに（真の意味で）頭が良いんだろうという印象が強烈でした。そしてこの答えは学校教育にあると気づくのにそう長くはかかりませんでした。

生き生きとした人間らしい教育、自分で考えて幸せに生きる力を身につける教育、そんな教育を日本でも作りたいと思い、長男の入学時に仲間とたんぼぼ小学園を作りました。何の認可も受けていません。誤解を恐れずにいうなら『有志の集まり』で、完全に『市民立』の学校です。

Q: 地元の学校との関係は？

子どもたちは、地元の小学校に籍だけ置いていて、実際は平日昼間にたんぼぼ小学園に通う形を取っています。ですから、卒業は地元の小学校から卒業証書をいただきます。

Q: スタッフはどんな方たちですか？

当初は、原発反対運動で出会った、博識で志が高く、また何よりも『いのち』を真っ先に大事にする仲間を中心に声をかけ、そこから広がる素敵なおかげで、今では史上最強と思えるスタッフ陣です。



Q: 「たんぼぼ小学園」の教育方針は？

世界には、シュタイナー、モンテッソーリ、イエナプラン、サドベリーなど魅力的な教育がたくさんありますが、たんぼぼ小学園は特定の教育方針に沿うのではなく、それらの良いところを取り入れ、みんなで話し合い、子どもたちが人間らしく生き生きと成長できるように流動的に進化しています。何より主体である子どもたちが自分で考える力を育みたいので、機械的で意味のない漢字や計算の反復練習も、丸暗記をさせることもありません。宿題もテストも通知表もない中、子どもたちは学習面でも精神面でもたくましく育っています。大人からの指示を待つのではなく、自分たちで考えて行動することを大事にするので、そこにはたくさんの回り道や失敗がありますが、それこそが成長の糧なのだと考えています。」

Q: どんな教科があるのですか？

ことば、かず、理科、社会、音楽、畑、家

庭科、芸術、英語、運動、工作などです。理科の『仮説実験授業』などは魅力的ですが、見てもらえないので残念です。



Q: 畑(農業)は何をやっているのですか？

畑では自分たちで食べたいものを作っているのですが、その日にやる作業を終えたら、残りの時間は自由時間にしています。子どもたちは、かくれんぼをしたり木登りをしたりして畑で遊びながら、いろんな生き物や草花など、いろんな発見をしていますよ。

Q: 義務教育なのに、テストも通知表もなく、親は不安ではないでしょうか？

義務教育は、『大人が子どもに対して教育を受けられる環境・機会を与える義務』であって、子どもが既存の学校に通わなければならない義務ではありません。年度末に作った手作りのアルバムに、スタッフが書いて下さるメッセージが通知表代わりです。



Q: どんな子どもたちが来ていますか？

やはり教育方針に期待して下さる親の思いや願いが前提にありますね。玉村だけでなく、前橋や高崎、また埼玉県の上里町から自転車で通学している子もいますよ。有機農業で頑張っている農家の方や、公立学校の変なルールに違和感を持っている親の子ども、ま

た地元の小学校で苦しくなって行けなくなった子どももいます。

Q: 発達課題がある子どももいますか？

そういう子どものことは意識していますが、例えばアスペルガーの子どもも来ていましたが、親が心配したようなことはなく、みんなに溶け込んで一緒に過ごしていて何の問題もありませんでしたね。ある子は、途中で来られなくなりましたが、親はこういう場があることを知っただけでも救われたと言っていました。

Q: こういう学校を続けていくのは、経営面でも大変なのでは？

学費は月 15,000 円なので、スタッフの方には時給 1,000 円だけで殆どボランティアでやってもらっています。今も、ボランティアのスタッフを募集中していますから、ぜひ。

Q: 困っていることは？

学割がきかないことです。前橋から来ている姉弟の 3 人で月 3, 4 万円のようなので、なんとか支援してもらえないかと県に要望しています。

最近嬉しかったこと

— 自分たちで考えて行動する子どもたち

飼っていた鶏が、(すぐ近くは烏川に続く荒地なので、たぶんキツネかイタチにやられて) 死んでしまいました。子どもたちはショックで、この後どうするか会議をしました。また飼いたいという子が 4、もう飼わないという子が 6 で、飼わないということになりました。ところがしばらくして、『飼いたい人で飼う』という提案を持ってきました。私は全く考えつかなかった意見です。『すごーい』と思いましたね。

今、問題になっていることは、道路でのリップスティックの事です。近所のおばさんが道路でやらない決まりになっているんだからと、すごい剣幕で怒ってきました。そこで子どもたちは規則を調べてみました。すると一日の交通量がある基準より少ない道路はいいという規則を見つけました。そして毎日お昼の時間に、前の道路の車の台数を調べ始めたのです。今度、そのおばさんが来たら、ちゃんと話し合ってみようと思っています。こういう生きた知恵を自分たちで生み出すんですね。(ツッキー晶子さん：談)



<取材を終えて>

ウクライナ戦争の惨状や最近の暗い世相の中で絶望的な気分になっていましたが、「既存の教育にとらわれないたんぼぼ小学園のようなオルタナティブスクールで育った子どもたちは、自分の力で幸せな人生を掴み取っていくに違いありませんし、そんな子どもたちが作る未来は非常に明るいと信じています」と語るツッキー晶子さんの言葉によって、子どもたちの生き生きとした表情とともに、明日への希望が見えてきたような半日でした。お忙しい中、取材に応じていただいてありがとうございました。なお、記事の一部は「土と健康」(有機農業研究会、2020年12月)のツッキー晶子さんの文章より掲載させていただきました。

《取材・撮影・文責：瀧口典子・大山仁・倉林順一》